三月江戸大火獄舎焼亡罪囚徳故高野長英脱出不知所之

長作者吉右ヶ仙蔓医賀松井元瞬ヶ難し書陸中の産出寄
俊斎方にて二月二十日夜小伝馬町牢獄焼亡重囚長英ハ
定て[illegible]ヒ放り置候所者何方へ奇り候哉
[illegible]

六月京都ゴロ興国草本舎あり高井正芳賀島近信等主催
出品凡二百種其中今一ヶ和蘭産なり

七月阿蘭陀書翻訳物出板と天文臺許可を受くべし と今す

十月大文方流川六蔵に和蘭国書譯文を他ヶ漏らしたりと
罪蒙り豊後臼杵藩ヶ幽囚せらる

[illegible]

徳川家人勝麟太郎始て和蘭学を修む時年二十三

[illegible]

○

紐文暦斯語府物譯 コンスタンチヌス

[illegible]

蘭製手引草 出雲人藤岡雄市 著撰

[illegible]

算法圓理通 豊後人石川明卿 述訳

[illegible]

醫療精義 播磨人石原惟介 著撰

[illegible]

○流川敬直因中歌 上書参見

[illegible]

二月宇田川興齋に天文臺譯員十月高須松亭に亦補譯員

[illegible]

桂林宗建 和蘭學教場大成館を開く長崎學堂其初建也

[illegible]

大塚同庵 東西洋砲術を以て學塾を建つ弟子蜂郎

[illegible]

鈴木春山 多く兵書を譯述す罹疫亡逝

[illegible]

高良齋 眼醫十年其術盛ヶ行う一夕招疾頓命

[illegible]

黒川良安 加賀人なり本藩前田侯の侍醫と為る時年三十

[illegible]

池部啓太郎 江戸在因五年寛解ケて熊本ヶ歸る時年四十九

[illegible]

三兵活法 上書第十参照

[illegible]

鈴木春山譯

[illegible]

兵學小說

[illegible]

鈴木春山譯

[illegible]

海上攻守略說

[illegible]

運西砲術器

[illegible]

大塚同庵撰

[illegible]

同氏譯 [illegible]

拔陽龍學校全書 藤岡雄市撰 上書

[illegible]

砲術玉道真傳 小出長十郎撰

[illegible]

渾發量地速成 同氏譯 [illegible]

萬勤歸一 亜墨利加竹枝 井上春洋 門流人石撰 池部啓太撰 上書参見

[illegible]

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

鍋島侯齊正公西洋種痘法の必用を知り其實行を求めと和蘭人3半痘苗の相齎を註文す

甲斐人唐橋元恭ニ京都蘭業學七料を設く

大坂人田邊莊千里ミ熊本ニ往き池部啓太ニ從學僅ニ一年

砲術の真傳を授けらるる

正月病學通論　緒方洪庵撰

三月梅砲新論　藤井三郎譯

同月西醫今日方　藤林泰助撰

七月蘭學會騰　神田貴南撰

九月内科手術　杉田成卿譯

十月矯脱用法　杉田成卿譯

高島流砲術を西洋流ト改稱せしめ實彈發射の操練を許す

鍋島侯注文の牛痘苗来ニ長崎ニ於て種痘不發珍更求良苗

川本章民始て寫真鏡用法を唱出し又燒付の功用を說く

和蘭小通詞西吉兵衛大通詞ニ陞り幣賞を蒙正す

長崎通詞本木昌造及北村元助品川藤兵衛楠林定一郎四人相議し鉛製活字板を和蘭より購入

藤井三郎ハ英文錯板訂者從て陸奥の英學發揚を作し恩榮り砲術新編一十訳成ニ後り文範を著ラし稿成て世ニ行はる其ニ序ニ記す

和蘭傳書　宇田川興齋譯

水星火星表

洋外通覽　安積良齋撰

洋外紀略

西洋小史

和蘭文典後編　箕作阮甫撰

增補蠻語箋　箕作阮甫撰

萬動理原　田邊莊十郎撰

三月幕府令して醫師中の蘭方使用を禁し且醫書の出版を絶て醫學館の許可を受くべしと

五月阿部閣老諸有司を令して海防策を進言せしむ

代官江川太郎左衛門息稙三郎を上陳す

七月和蘭船入港して牛痘苗を齎来す高島秋帆建議す

大坂堂島米市を禁ず

牛痘小考　楠林宗達撰

牛痘奇法　齋藤元恭撰　江戸

引痘要略解　京田立齋撰　江戸

西神陳痘方　日野鼎哉撰　京都

治痘真訣　杉田成卿譯

濟生三方　杉田成卿譯

新宇小識　宇部龍平譯

水蒸船說畧　箕作阮甫譯

増訂荷蘭語彙　佐久間修理校

伊豆代官江川太郎左衛門反射爐を築く

尾張藩士上田帶刀蘭學館を開き蘭學砲術を講ず

森山榮之助其救援を尽す

阿蘭陀通詞一統日本諸外國語を兼習せしむ　西吉兵衛

箕作阮甫歐洲史書を譯し萬國史學を講習す

九月幕府令して西洋書の翻譯刊行を制限を加ふ

十月佐賀藩反射爐を築き鎖鑰を鑄砲工事を起す

高野長英潛匿六年事露はれ捕吏を向乃刺一人傷一人身亦自殺

電擊銃略記　小山杉溪譯

聽駒器用法略記　杉田成卿譯

地學正宗　永井朝吉譯

三才正家　森田伍一郎撰

阿蘭陀語一名言譯　新宮涼亭譯

窮理外科則　上田帶刀撰

西洋砲術便覽　暁雪樓主人譯

三兵答古知幾　高野長英也

三月和蘭甲必丹江戸例參

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

四月佐久間修理江戸に定住して砲術一流を立つ [illegible]

浦賀奉行淺野長祚西洋式を以て砲臺を築く [illegible]

八月島津儀斉製煉處を鹿兒島に置き化學應用諸器製造す [illegible]

九月水戸藩醫柴田方庵始て驗温器を製造す [illegible]

礮學圖編　佐久間修理撰

砲術發揮　譯者不記

海防火攻新覧　手塚律藏譯

鈴林必携　上田亮章撰

八紘通誌　箕作阮甫譯

外科必讀　箕作阮甫譯

醫則　坪井信良譯

蘭語通　牧穆中撰

風船問答　同撰

氣海觀瀾廣義　川本幸民撰

牛痘解蔽　西村春雄撰

[illegible]

五月武州大森海岸に大砲演習場を新設す [illegible]

八月和蘭甲必丹より明年米利堅西亞兩國の使船相繼て渡來せん事を上申す

名古屋藩新に種痘所を置き本所の外にて行ふ事を禁ず

江戸士人渡邊以親八圖儀を用て彈道測量法を唱導す [illegible]

松代藩士佐久間修理礮卦を著して上版の允許を請ふ [illegible]

昌平學官之れを卻く

大垣醫人飯沼慾齋年七十歳草木圖譜の稿を起す [illegible]

新訂坤輿略全圖　柴田收藏撰

阿弥冊度用法圖説　渡邊儀右衛門撰

用礮軌範　砲臺編　武田斐三郎譯

礮卦　佐久間修理撰

軍用火薬考　箕作阮甫杉田成卿同譯

理學提要　廣瀨元恭譯

蠟蘭埋略暦　小出由岐太譯

西洋學家譯述書目　穂亭撰

[illegible]

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

六月米利堅國使船（使節ペルリ）相州浦賀ニ來リ國書ヲ出シ通交ヲ求ム此時家慶將軍薨去世子家定襲職（代十三）米使ニ因テ明年ヲ約シテ去ル乃箕作杉田兩譯員ニシテ國書ヲ翻譯セシム（天文方手附蘭書和解御用手傳出役杉田成卿箕作阮甫此旨相[illegible]）

○右異國書翰和解御用[illegible]

七月魯西亞國使船（使節プーチャチン）肥前長崎ニ來リ國書ヲ出シ交通ヲ求ム奉行ヨリ急使ヲ以テ江戸ニ送ル十月川路（左衛門尉）筒井（肥前守）兩人ヲ遣リ返輸ヲ與フ明年正月歸帆（此行箕作阮甫古賀謹一郎及箕作阮甫從テ通詞森山榮之助）

八月高島四郎大夫ノ罪ヲ赦シ江川太郎左衛門附屬トス

九月幕府令シテ二本柱三本柱ノ大船ヲ造ル事ヲ許ス

十月和蘭甲必丹ニ依嘱シテ軍艦兵書ヲ求ム

十一月水戸藩ニ令アリテ西洋式軍艦ヲ製作セシム

土佐人中濱萬次郎（二八）米國語ヲ善クスルヲ以テ幕府ノ小吏ニ擧ケラル

箕作秋坪（二九）市川齋宮（二六）並ニ天文臺譯員ニ補セラル明年又木村軍太郎（二八）柴田收藏（二五）譯員ニ擧ケラル

通航一覧
量地手引草　村田恒光撰
遠西武器略說　市川齋宮撰
萬國地名捷覽　柴田收藏撰
米利堅新誌　鶴峯戊申譯
暎咭利紀略　荒木驁之進譯（津藩士）
外蕃通表　大槻恒輔撰（仙臺人）
蘭學重寶記　加壽麻呂撰（本姓名未詳）
泰西王氏銃語　竹内東白訳
熕砲發射表　大塚同庵撰

米魯兩國使ノ來ルヤ德川幕府ハ二百年來鎖國ノ法度ヲ開キテ其通交ヲ許シタリ於是朝野ノ人士其當否ヲ論シ是非ヲ諍ヒ海内騷然焚然其開國論者ハ固ヨリ攘夷鎖港ノ徒モ亦彼ヲ知リ己ヲ知ルノ兵訣ニ由テ指ヲ横文ノ冊ニ染メ皆ヲ海外ニ注ガザルハ無シ西洋學藝ノ發達新ニ其勁ヲ加ヘタリ本書ハ外交史ニアラス政事史ニアラス故ニ夫等ノ事ハ安政以降大略省キテ載セス但各種學術上ニ就キ其因革隆替ヲ連記スルナレハ或ハ一ヲ掛ケ萬ヲ漏スノ恐アラン又著譯諸書ノ如キモ只其書名ヲ擧ケテ解題ニ及ハサル者多シ之ヲ知ルヘシ

正月米國使船再來ル乃武州横濱ニ應接所ヲ設ケ林大學頭井戸對馬守ヲシテ通交條約ヲ結ハシム通辯役堀達之助森山榮之助並ニ和蘭通詞本木昌造後亦森山榮之助

○[illegible]

五月浦賀港ニ造船所ヲ造リ大船鳳凰丸成ル

七月幕府令シ大船製造ニ付異國船ニ紛ハシク日本總船印白地ニ日之丸ノ幟ヲ相用可申候

閏七月英吉利軍艦長崎ニ來ル明年佛蘭西軍艦モ亦來ル並ニ米魯兩國ニ準シ通交ヲ諾ス和蘭モ改テ四國ノ列ニ加フ

九月魯船又來リ大坂灣ニ入ル尋テ下田ニ赴キ大風ニ遇ヒ破船ス同國戸田浦ニ於テ新船ヲ造リ而シテ歸國ス

○[illegible]

薩摩藩新ニ造船所ヲ櫻島ニ築キ沖一平ヲ技師トシ石原（助能）

橋口等ヲ助師トス又川本幸民ヲ招キ顧問ニ備フ

加賀藩新ニ壯猶館ヲ建テ西洋學藝ヲ講習セシム

金海奇觀　大槻清崇輯
合衆國小誌　小関高彦譯
三語便覧　村上英俊撰
新撰年表　清宮秀堅撰
銃劍環言　大槻俊齋譯
豪土芻言　田結莊千里撰
火攻採要　川勝求天
火攻精選　淺野教德
火技範　平録一
海岸戰話　相澤才助
礮具圖說　結城錦肴
砲術訓蒙　杉田成卿譯

正月大文方蕃書和解御用の局を獨立せしめ九段坂下に公開

洋學所を建て儒役古賀謹一郎を頭取とす（四月五日）

二月幕府新に講武所を建つ砲術は西洋流と定む高島善平

其教授方頭取となる

○幕府砲術中井剛太郎を用ひ引金を用ひ銃身を改造して雷管を用ひ出張す

○所用小銃ゲベルと呼ぶ剣刺銃身を改造して雷管を用ひ引金を用ひ銃身を改造して雷管を用ひ出張す

三月薩摩侯所造洋式軍艦昇平丸長十五間品川灣に入りて

幕府に献ずる幕府更に二隻建造を命ず

○大槻磐渓官船建造を命ず

品川灣に入りて

七月紀伊藩新に伊達慶賀を称し八月水戸藩も下間良弼を

招き共に蘭學を興す十月尾張藩新に西洋學館を開つ

○學館初番士上田帯刀所設（正出張役）

天文方山路弘毅

テレガラフ使用御用被命八月於

浦賀器械装置して電信の利用を將軍の親覧に供す

八月英仏阿蘭陀の將軍に書を贈る

土佐侯山内豊信

大艦建造の意あり長崎通詞本木昌造を喚

二月洋學所を改て蕃書調所と称し而して洋學教場となす

達瀬少老

督之教授助教の諸員を定む

○西洋式の一書を賜へ

○大文方蕃書和解御用

○大文方山路弘毅

大野藩更に蘭學館を興す長門人伊藤慎蔵

五月水戸侯所造艦成命名旭丸納之幕府賞賜黄金百枚

長門侯も大船を造る

仙臺侯亦江戸人三浦乾也を造船棟梁とし松島に工場設置

八月和蘭軍醫ポンペ来る幕府醫員松本良順

十一月高島四郎太夫

十二月長崎奉行所に阿蘭陀通詞人少且未熟者多く翻譯

通辯等差支の向後一同格別相勵又有志者勝手次第

磐古可致事と令す

荷蘭語林集解　杉田立卿撰　男成卿訂

譯和蘭文典　大槻書齋

書曲垂字筌　榊令輔

泰西三才正象　永井朗吉

泰西紀略　大槻恒輔

安藤軌範　下曽根金三郎

安兵運動軌範　石井修三

砲藥新書　中井剛太郎

百発撃針（ニードルガン）図解　小山杉溪

國朝砲術權輿録　國文若拙

道富ハルマ字書校刻起業　桂川甫周

○江戸在住蘭学者　勝海舟日記

正月蕃書調所の開校式を擧け一般人士の入學を許す

三月觀光丸長崎より大坂を經て江戸灣に入り四月海軍教授所を置く

十月米國使ハリス来り乃ち岩瀬肥後守を主任として通交條約を議定せしむ　通辯は森山多吉郎

長崎奉行所に於て鉛製活字を用ゐ横文諸書を印行す

會津藩新に西洋學館を建つ　鹿児島佐賀両藩各電信機の使用を試む

蘭方醫師伊東戸塚大槻坪井等八十餘人相謀て種痘館を神田於玉池に建て兼て同学講習の場に充つ（西洋医学校の濫觴）

増補譯鍵　廣田憲寛
和蘭對譯辨書　猪耕齋
西算速知　福田理軒
洋算用法　柳川春三
洋學指針　柳川春三
地球儀用法　大島圭介
蕃語象胥　佐々木元俊
萬國普通暦
外蕃通略　吉田方暠
靈敎遊濵流紀略　横山由清
西醫眼論　廣瀬元恭
知生記　廣瀬元恭
紫病龜鑑　青木周弼
民間内外科要法　杉田玄端
內服內功　山田貞秀
磁石震氣療法　伊藤慎蔵
全體新論
醫家必携
三兵教練　石井修三
礮兵操練全書　村田蔵六
西説矢候　渡辺国太郎
撒兵演式　島村鼎甫
銃軌範　里見大四郎
大砲使用軌範　寺地強平
觀銃式　千野俊平

七月家定將軍病む伊東玄朴戸塚静海竹内玄同等召されて侍醫となり尋て衆醫員に和蘭醫術兼修可致と令す

是月外國奉行を置く　永井玄蕃頭　岩瀬肥後守　水野筑後守　堀織部正　井上信濃守　補之

八月大野藩にて洋式帆船を造り大野丸と命名し品川へ入津

長崎に英語傳習所を設け英人蘭人を聘して教師とす

コレラ病大に流行し春夏海内に遍し

十二月軍艦頭取矢田堀景蔵咸臨丸に乗りて帰東す

尾張人柳河春三蘭學醫師を以て紀伊侯に仕ふ

和蘭字彙　ツーフハルマ　桂川氏校刻
築城新法　廣瀬元恭
散兵定則　安場敬明
泰西兵話　小寺弘
扶氏診断　山本節庵
脈論　津田淳三
コレラ病論　新宮涼亭
虎狼痢治準　緒方洪庵
除痘約論　柳川春三
西醫略論　英醫合信
萬寶玉手箱　杉田成卿
萬國航海圖　武田簡吾

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

二月長崎の蒸氣船運用傳習を停む　觀光丸修復の命あり

四月川本幸民杉田玄端並に蕃書調所教授方と爲り村上英俊小野寺丹元西周助津田眞一郎並に教授手傳と爲る

教授方作操三十人扶持年給金二十兩
教授手傳作操二十人扶持年給金十五兩

六月外國方に翻譯員を置く松木弘安箕作秋坪原田敬策等補之明年福澤諭吉も亦譯員となる

十月種痘館を下谷に新營し移て種痘所と改稱す

十二月堀達之助蕃書調所對譯辭書編輯主任

洋醫フォン、シイボルト長崎再來

佛蘭西詞林　村上英俊
瀛環表　萬國政表　岩瀬修理
英米對話捷徑　中濱萬次郎
信管截斷表　田中清甫
醫家玉海　兒玉順藏
内服同功　二篇　杉生方策
嬰孺新説　英人合信譯
五國條約書　米英魯佛蘭
御開港横濱大繪圖　橋本玉蘭齋
是年正月横濱長崎箱館を外國交易場と定め一般に貿易すべき事の布令ありたり
洋錢便覽　今泉某　江戸人名字未詳
地理全志　漢訳訓点
人身分離則　新宮涼亭
航海金針
博物通書

正月軍艦奉行木村攝津守乘咸臨丸赴米國艦長勝麟太郎

三月井伊大老水戸浪士のため途上被殺

七月普魯西國使來て和親條約を結ぶ電信機を贈物として其使用法を傳習す市川齋宮加藤弘藏就て獨逸語を學ぶ

九月長崎に西洋式の病院を創立す松本良順其院長たり

十月種痘館を幕府直管とし種痘所と改稱す仙臺醫員大槻俊齋を挙げて種痘所頭取とす

十一月長崎通詞本木昌造製鐵所取締役と爲る

十二月蕃書調所に筆記方を置き外國新聞を口譯手記す

英語箋　石橋政方　長崎人
築城典型　大島圭介
萬國政表　岡本博卿
萬寶新書　宇田川興齋
華英通語　福澤諭吉訓
眼科新編　伊東貫齋
○箱館五稜郭成る　結構純依和蘭築城法

三月長崎製鐵所竣工

蒸気船の造船所を一橋門外に新営し洋書調所と改称

前和蘭醫員ライボルト再来す七月幕府これを江戸に招致し醫學上の質疑すべしとの命あり

十月種痘所を西洋醫學所と改称し洋方内外科教場とす

十一月外國奉行竹内下野守松平石見守両使を歐洲に遣り

農商説　神田孝平撰

砲科新論　大島圭介譯

談天　清人李善蘭譯　福田理軒訓點

流環志略　清人徐繼畬撰　井上春洋訓點

連西方學　伊東貫斎撰

五月蕃書調所を一橋門外に新営し洋書調所と改称

長崎人上野彦馬も亦寫眞術を學び家を立つ

六月和蘭國より軍艦製造を依囑す

八月緒方洪庵江戸に召され西洋醫學所頭取となる

十二月陸軍奉行を置く　歩兵砲兵騎兵を合立し後総て佛蘭西國の兵制を倣い武士及民兵を募り歩兵組を創立す

英和対譯袖珍辭書　堀達之助著

官版パタビヤ新聞

七新樂説　司馬凌海撰

舍密局必攷　上野彦馬撰

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

三月家茂將軍上洛六月海路東歸十二月海路再上洛

五月赤馬海峡ニて長州藩士等攘夷を唱へ米佛蘭三國船ヲ發砲し却て擊破さる七月英艦直ニ鹿兒島ニ入り薩州藩士と亦砲戰し英艦逃れ去る

八月洋書調所を更ニ開成所と改稱し其學則を更定し新ニ數學局を設置す神田孝平を教授方とす

長崎英語所を立山ニ移し洋學所と改稱す英蘭佛魯及支那五國語を講習せしめ數學を加ふ後又濟美館と稱す

松本良順三上士醫學所頭取と爲り校則を改革し醫道一新

鳥羽藩士近藤誠一郎攻玉塾を建て蘭學洋算及航海術の教場を起す

英吉利文典

同　單語篇

同　會話篇

萬有新編　物理學の初歩

硝石製煉法　櫻寧居士

西洋時辰儀定刻便覽　中村好則

銃戰紀談　長山樗園

文久年間ニ西洋譯書の世ニ出づる者前後ニ比して其少きを覺ゆ是れ家藏本の上ニ就きて云ふ如くなれど或は時勢の然らしむる所ならんか其子細は横濱開港當時より彼の攘夷唱導の徒が商人を脅かして夷人と賣買する者を斬り殺すなどありしより洋學者も其暴威ニ顧慮して翻譯も手控となり又對ニ出板者も少きかと思はる

或人曰く當時の學者も開國ニまれ鎖國ニまれ國事ニ奔走して著訳など者みる者多からざりしならん此言一理ある如くなれど攘夷鎖國ニ奔走せし人々も大率漢學者流ニて洋學修むる者ニも甚少し故ニ一説として存せんのみ

五月海軍操練所を兵庫港神戸ニ置き軍艦奉行勝安房守ニ命じ摂州海岸の警備を督せしむ　十月幕府勝を免職閉居一年

佐久間修理將軍の召ニ應し京都ニ上り盛ニ西洋文化を唱へ出し七月肥後浪士川上彦齋等の爲ニ殺さる

加藤弘藏箕作秋坪福澤諭吉並ニ幕府直臣ニ擧らる

鹿兒島藩より英米両國ニ留學生十六人を遣る

勘定奉行小栗上野介建議して相州横須賀ニ造船場設置

四月新聞紙　横濱發行　一月二日（但六月廢刊）

砲軍操法　歩兵心得

歩兵制律　歩兵練法

築城典型　馬療新書

右ハ陸軍所刊行

佛語明要　村上英俊撰

博物新編　英人合信原撰　漢文訓点

聯邦志略　米人裨治文撰　箕作阮甫訓點

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

二月開成所ニ理學化學ノ二科ヲ教授ス 明年星學兵學

十月長崎精得館ニ物理舍密ノ二教場ヲ設ク

醫學所モ和蘭學則ニ準據シテ七科ヲ置ク毎週試業ヲ行ヒ

生徒ノ學力ヲ定ム　教授諸職ハ大略開成所ニ同シ

[illegible]

西洋各國盛衰強弱表　津田真一郎譯

萬國公法　米人丁韙良漢譯

礮術新編　山中敬雲譯

熕氏砲論　內藤類次郎　尾崎又八　合譯

三元素略說　廣川晴軒撰

外科醫法　佐藤舜海譯

[illegible]

四月幕府令 海外修學并貿易ヲ許ス

家茂將軍先是長州問罪ノ師ヲ督シテ大坂城ニ駐在ス 六月

○勝安房守復職從軍 七月將軍病ム

九月海軍留學生榎本釜次郎 赤松大三郎等新造ノ軍艦

開陽丸ヲ乘リテ歸朝ス

十月海軍奉行ヲ置キ十一月講武所ヲ陸軍所ニ併ス

十二月一橋中納言慶喜 勅命ヲ以テ德川將軍十五代相續

是月開成所ヨリ中村敬輔 箕作奎吾 菊池大麓 林董三郎 外山

捨八等十四人ヲ留學生トシテ英國ニ遣ハ

佛蘭西國ニテ博覽會ヲ開ク我國ヨリモ出品セシカハ德川

昭武ヲ遣ハ 箕作貞一郎 名村泰藏 渋澤榮一 高松凌雲

等随行 町人トシテ清水卯三郎 若井兼三郎等モ随ヘリ

丹後人嵯峨根良吉 西洋砲学ヲ以テ鹿兒島藩ニ祿仕ス

秋田藩醫學校ニ洋學ヲ置ク 佐藤貞壽其教頭タリ

[illegible]

泰西國法論　津田真一郎

西洋事情　福澤諭吉

雷銃操法　福澤諭吉

生理發蒙　島村鼎甫

創痍新說　島村鼎甫

新藥百品考　坪井信良

醫療新書　坪井芳洲

○經濟小學　神田孝平

洋學便覽　柳川春三

佛蘭西文典　柳川春三

增補改正英和對譯袖珍辭書　開成所發刊

和英語林集成　米人平文　岸田吟香共編

智環啓蒙　英人理雅各原撰　柳川春三訓點

英國步兵練法　赤松小三郎

[illegible]

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

五月慶喜将軍在二條城松平春岳山内容堂伊達宗城及島津久光等を饗應す米國寫真師ビワトを召し撮影せしむ

○萬國新聞紙 [illegible]

十月徳川将軍慶喜上表奉還政権 [illegible]

○ [illegible]

十一月開成所を外國奉行の所管とす

神田孝平柳川春三を頭取とせしが明年國事多難とて閉校

十二月王政復古の大詔出づ大政官を興し総裁議定參與の三職を置く　関白職将軍職等廃

○三條大橋 [illegible]

是月大日本國臺を造る　刻者前播磨介中村元祥

[illegible]

野戦兵嚢　仙臺武庫刊　瀬脇節蔵

戦闘術門　長門陸軍學校　大村益太郎

佛蘭西答屈智戦　村上英俊

活兵要略　香山道太郎

三兵養生論　久我俊齋

筆算提要　伊藤慎蔵

華盛頓軍記　廣瀬唯一

西洋雑誌　柳川春三

寫真鏡圖説　柳川春三

穆氏樂論　江馬播園

西洋衣食住　片山淳之助

享保以来一百五十年洋學者流の其間に輩出すし茂林名匠国より教ふるに違あらず然共其事業を立て審判を内外に施しれる者蓋三人曰く大槻磐水曰く伊能東河曰く高島秋帆　大槻磐水は蘭學階梯を刻本として世に布き一般人士に横文の讀むべく蘭語の釋くべきを示せしも斯道發達の此れ由りされぞ徳川幕府蕃書翻譯局の創置者に許負の擧らる此翻譯局は帝國大學の源泉なれ　伊能東河は天度の里數を測定し全國の沿海を實測し日本國の位置形状始て完し其圖精且確後日英國人をして瞠若たらしむ真箇空前絶後の擧　高島秋帆の銃隊訓練を創めしは今日全國皆兵の基本なり火技中興洋兵開祖たるの語豈世を欺かんや

正月參與東久世通禧を兵庫港に遣り天皇親政を外國公使に告ぐ

日本國天皇告各國帝王及其臣民嚮者将軍徳川慶喜請歸政権制允之内外政事親裁之乃曰從前條約雖用大君名稱自今而後當換以天皇稱而諸國交際之職專命有司等各國公使諒知斯旨　御名　國璽

七月詔曰く江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地宜ク親臨シテ其政ヲ視ルベシ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ガ海内一家東西同視ノ所以也

是月東京に病院を建て英國醫師ウヰリスを聘して兵士の創痍を療治せしむ

八月天皇即位の礼を京都に行ふ　御年十七

九月明治改元一世一元を永式とす

十月長崎精得館を醫學校とし教學理化學を加ふ蘭人を其教師とす又濟美館を廣運と改稱し更に米人佛人を雇用して語學教師とす

開成所理化両教場を大坂に徒し舎密局と稱し十一月新校を建つ明年兵庫縣所設洋學校を合せて理學所と改稱す後又開明學校と稱す

二月京都にて大政官日誌發行　江戸にて中外新聞江湖新聞横濱に藻汐草大坂に内外新聞等相継て刊行す　六月近日新聞紙類刊行人心を惑し候品不少候に付宋經官許刊行ハ差停候相背候節ハ屹度御咎可被仰付候と令あり悉廢刊

立憲政體略　加藤弘蔵　　外國事務　福地源一郎

和蘭政典　神田孝平　　訓蒙窮理圖解　福澤諭吉

中外貨幣度量考　　英文熟語集　小幡篤次郎

蘭學事始　文化末杉田玄白斯學の起立困難を手記して大槻玄澤に與へたる者原本久佚去年神田孝平これを湯島坂上露店に得て杉田廉卿に贈る福澤諭吉曰く先輩の苦辛宜く後世に傳ふべしと刻費を供して上木せしむ　明年正月發行

先是福澤諭吉其英學塾を芝新銭座に開き慶應義塾と稱す

三月東京遷都先是五條の誓文を宣せらる廣く會議を興し萬機公論に決スベシ又智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシとあり乃大政官に集議院待詔局を置き衆議民言を受けさせ給ふ

六月大學校を東京に置く即徳川幕府昌平學問所なり十二月開成所を大學南校と稱し醫學所と病院を合せて大學東校と稱す其學規曰道之為體無物不在無時不存其大無外其小無内乃天地自然之理人之所得而有其用則綱常其事則政教其詳則皇國以至漢土西洋諸書所載而學校所以講斯道廣知識成材德而奉實用於天下國家者也蓋國典之要在敬神祇尊皇道學者先務矣孝悌彜倫之教治國平天下之道莫備於漢籍又西洋則闡幽析微叢實日新之業如兵學醫學國之興敗民之死生繋焉雖外國其所長亦採擇以為吾有勿論而已此則不悖主上所誓破舊來陋習本天地公道求智識於世界振起皇基之聖旨是乃大學校規模也

洋學自普通學至專門學科其理ヲ究メ其技ヲ精スルヲ要トス　醫術其理ヲ明ニシ薬性ヲ審ニシ治験院ヲ設ケ療術實究ヲ要トス　兵法今此局ヲ設ケズ姑ク是ヲ兵部省ニ付ス

十二月東京横濱間電信線開通　去年九月大坂通信

静岡藩新に兵學校を駿州沼津城に設け各般學藝を教授す

兵學校記　明治紀元朝廷封我徳川公於駿河遠江治于静岡從者如歸市乃命有司所在安插而別致水陸軍人及子弟俊秀者於沼津以城充學館以講兵課業有教目曰漢學曰洋學曰教理曰圖畫曰體操曰練兵曰騎曰泅修之一二年其人彬彬可用以故列國行人必請来観或遣其藩人就而學若鹿島徳島狝聘吾學官以訓練蓋以維新之初列國學制未備而沼津兵學為之率先也四年撤藩為縣以學館合於陸軍兵學寮於是在學諸子半升于朝半去改業為祈牧為教官為商為農咸莫不竭力國家而知名當世者則昔日昔學之功至是始彰　下略　○中根香亭撰文

和蘭學制　開成所

和譯英字書　鹿児島藩　サツマ辞書

交易問答　加藤弘之

黴毒新説　石黒忠悳

英政如何　鈴木唯一

蒸氣器械書　海軍學校

英文典　慶應義塾

世界國盡　福沢諭吉

實樂鑒法　石黒忠悳

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

七月大小各藩より貢進生を召し大學南校に西洋學藝を修めしむ尋て米佛諸國に留學生を遣す

大學に天文曆道局を置く八月星學局を改稱し内田五觀をして曆作の事を司らしむ　天保改曆以來三十年天度亦差小五觀思へらく是れ大陽曆を用ゐるの正確なるに若かず乃其理義功用を進言す政府亦萬國共通の便利なるを以て大陽改曆の事を令す　明年文天文局を改稱

京都に言語局を設け獨逸人ワルネルを聘し理化學試製目黒城器に洋鉛を用ゐる

長崎製鐵所に活字製造所を置く鉛製活字は本邦に米國教師ガンブルを雇用し重ねて其法を收ひつ能はず此去年上海より米國教師ガンブルを雇用し鑄造印刷始て成功す吉昔に造て製鐵所を主り大坂橋濱東京に活版所を開く今日に於ける活字版の隆盛も昌運の功績と云ふべし

十二月郵便開設

正月横須賀第一船渠設工（元治創工慶応七年）長崎造船所設置製鐵所改稱

四月大學を文部省に改む南校東校共に大學の二字を去らしむ

南校生徒一千二百人東校を學則を獨逸に改む本科據科合五百人

獨逸教師二人（ホフマン、ルルケ）を聘す然に獨逸語に通ずる者なし司馬凌海の外より浸海有故退校猶立開塾し長谷川石黒両舎長其者を就き強ひて復校を求め通譯の任に當らしめしと聞く（先是南校に獨逸學教場を設く）

七月大中小二百七十藩を撤し三府（東京京大阪）七十縣を置く因て貢進生停止

十一月南校新に生徒を募つ募集の急なるに二十餘名とす

十二月文部省令　今般西洋女教師を雇い共立女學校相開き業成より平民に至り入學差許候間志願者へ願書差出可申候生徒〃女子八歳より十五歳まで授業料毎月金二両可相納事　明年百市校に女學を設く

先是名古屋知歌山両藩新に洋學校を起し金澤藩亦醫學校を設く大藩既に如是なれと中小の藩士より都鄙處士に至り農然として洋風を慕ふ昨日據実の徒も亦一朝其面を革ひ於是飜譯の業盛に行はれ譯書刊行前後數年公私甚多し

國法汎論　加藤弘之
勧善訓蒙　箕作麟祥
英和字書　東京和蘭社
輿地誌略　南摩羽峰
化學訓蒙　石黒忠悳
字語譯義　長崎英學所
西國立志編　中村正直
物理訓蒙　古川陽朔
智法解纜　高山樗
自由之理　中村正直
算算訓蒙　塚本明毅
淋氷小學　西川春洲
文明論概略　福沢諭吉
動物訓蒙　田中芳男
病理通論　三宅秀
學問ノススメ　福沢諭吉
解剖訓蒙　松村瑞明
道理圓解　中村敬宇
西洋易知錄　伊藤慎蔵
星學圖說　神田孝平
泰西史鑑　石井良信
世界都路　長谷川政恭
星學初步　長谷川政恭
伊蘇普物語　渡辺温
泰西農學　緒方洪庵
地學事始　箕作秋坪
西史年表　西村茂樹

慶應義塾（旧称）三田新校舎に遷る生徒三百餘人　東京に於て英學佛學獨學者の私塾前後十八校學生多き百餘人少きも六七十人と云ふ今記憶する校名を擧くれば

北門社　山東直砥
共立社　大槻八
共學社　箕作麟祥
攻玉社　近藤真琴
春風社　司馬凌海
鳴門社　内田周平
同人社　中村正直

當時の世評に同人社と教育家を出し共立社と士人を出し慶應義塾を商工を出すといふ云へり

五月書籍館を湯島に開き大學書籍館を本館とす　德川幕府昌平坂藏和漢圖書（一万五千六百餘部）及天文臺所藏和蘭其他洋書（部数）等縱覽を許す

八月學制を定む七大學區を定め更に分ちて中學（二百餘）小學（五百三十餘）とす

男女年六才より悉く小學校に就學せしむ其告諭に曰く

人の其身を立て治産興業其生を遂ゲントスルハ智を修メサレバ業ハ身を立ツルノ財本トセフベシ從来學校ノ設アルモ學問ハ士人以上ノ物トシ農工商婦女等ハ度外に置ク是治教ノ習弊ナリ今般學制を定メ教則を改メ邑に不學の戶ナク家に不學の人ナカラシメントス

南後華士族農工商及婦女等自奮て學に從事セン事を期ス

九月東京師範學校を建て明年大坂仙臺並置す小學教師の養成場也

東京横濱間汽車鐵道成る九月開通式を擧く

十一月徴兵令公布男子滿二十歳皆兵役に就しむ六鎮臺を置く

大陽改曆（明治六年一月一日改曆）　負革改曆以来室曆寛政天保を改修三四西洋曆法を準據す故に猶是大陸曆なり至是竟に大陽真曆を行ふ事となる

四月南校を開成學校と改稱し東科を分置す諸藝學を佛國に取り鑛山學を獨逸國に取り法工理三學を英國に取る

大坂理學所を開明學校と長崎語學所を廣運學校と改む

八月外國語學校建つ先是南校に英佛獨三語科あり外務省に獨逸語學所あり両者を合して本校を建つ　明年開明廣運両校を共に外國語學校と改稱せり

二月東京日々新聞發行第一号活版二号以下木版なり

最初活字に印刷器に両種より集来り植字印行せしが其解版の後に使字すること能はず打ち直しまた悉く支選する能はず活版を不自由の者と云ふ木刻にせしとぞ

先是横濱毎日新聞を既に発行し活字職工を取寄所あり此前後京都新報名古屋新聞大坂新聞及郵便報知新聞並起

三月湯島聖堂に於て博覽會開張大槻家藏を陳列賞状を受し今般博覽會に於て故觀に供し衆人の知見を開導せし標旨不動嘉積スベシ仍テ付賞状完之　文部省博物館

四月日本政表　統計學始て興る

改曆詔　我國通行の曆タル大陸朔望を以て月を立つ故に二三年間閏月を置ザルを得ず終に推歩の差を生ず大陽曆大陽經度に從て月を立つ毎四歳に閏一日を置き七千年後一日の差を生ずるに過ぎず其便不便固より論を俟たず法明治五年十二月三日を以て六年一月一日とす

光人磐水之在世、毎歳以南至後十一日、設筭名曰新元會、今也開明廣運、大陽改曆、明治六年一月一日、即新元者也、紀筆含辭曰、王父光見、不可不繼、於是、東與光人磐息相及之士、曰杉田氏曰桂川氏、曰宇田川氏、曰坪井氏、曰英作氏、是日天晴氣徳、實主會一堂、椅觴交酌、亦一時盛業也、詩以記焉、　磐溪大槻茂

愼書先君磐水翁、開是此日、解春風、一事私曆新元會、愛泣今為天下公、　見引二張相逐、過家子素約無違、海と三府七十縣、終始新元更有誰、　宜春賓新元開會より於八十年

駐米公使森有礼、横濱新聞、乃福澤諭吉、西村茂樹、西周、加藤弘之、津田真道、箕作秋坪、中村正直と謀り改革の文化を請入れ人として明六社を興し二月明六雜誌を発刊す　學藝雜誌の始なり

和蘭醫事雜誌　坪井信良訳述醫事新聞を此書を始めす

佐倉順天堂（佐倉藩）、東京に移轉し病院を湯島に設す　先是順天堂（佐倉藩）、東京に移置し、數學塾を神田に建つ

大坂順天堂（坪井信良）、亦東京に移置し、數學塾を神田に建つ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

一月民選議院設立建言あり 後藤象次郎江藤新平副島種臣等八人連署
蓋英米の國態を倣はんとてなり 下巻参見
五月神戸大坂間汽車鉄道開通 後二年を経て京都間に開通
先是墨湾問罪の師を起こし蕃民を征服せしが清國と所属の違言を生ず
九月大久保参議を遣清大臣として處理せしむ其談判の用意と意なる
萬國公法を翻訳せしむ 十一月大使参議岩倉朝 下巻参見
十一月金星太陽を経過す海軍省天文局地理寮等各其行過を試測す
歐米星学者流し前後相継て我國に来り共に實測に従事せり
海軍部に風く英國音楽師を聘し歐洲楽曲を練習す 尋て陸軍亦練習す
十二月宮内省も其楽師を雇用し伶人に歐洲楽を教授せしめたり

萬國公法の急を必用を生ずるや翻訳局長其作麟祥に命ず
二十日間に成譯せしめと原書を英人ケント撰述して二巻の
大冊なり日限付の大事業なりとて麟祥と英書を通ずる者
十餘人を集め晝夜分譯して竟に日限通り成稿呈進す 社説
當時制度實興として金五百圓を與へらる麟祥謂ふ金を以て
分配せば面白からずと書物其他器物を買求め一統に分與し
たりとぞ
先是民選議院建言の政府の納るゝ所とならざるや新聞各社
民權自由の輿論を引起せしめんと筆陣を揮へて政府の差
置を攻撃す既にして日々新聞其餘を倒るし翻然尚早論を
唱出す末廣鉄腸情て一書を福地櫻痴に贈り其変説を詰問
櫻痴マネ一語ふれる答へたり果せるかな十月に至り東京
日日新聞に大政官記事印行御用の持命を受しと云ふ

一月電信幹線全通 伊藤工部卿上奏曰く方今政化の資ケ人智の進ム
ルに伴ひ電信線の功最多し陸線は東京より長崎に至り又青森に至ル
北海道館に小樽に通ず幹設セラル氣脉相通じ恰も隆盛
ノ澤に浴スルの輩下ノ如シ云ふ
二月醫制を設け試驗を行ふ理化學生理病理内科外科解剖藥劑七科の
試驗に及第せざる者を醫業を開く能はず 下巻参
十月淺草文庫建つ 湯島書籍館を徳川方官官職
場に充てらるゝより淺草舊米倉南隅に就き文庫を置く 下巻参見
當時庫藏の典籍を十四萬五千七百冊といふ
是月東京女子高等師範學校開校式を挙ぐ

四月醫學會社建つ 杜本順佐藤尚中林紀杉田玄端長與專齋戸塚文海佐々木東洋石黒忠悳三宅秀等五十餘名所設
先是小学令を珠算を佳めず一般の西洋式算術を用ゐしが然共
實行せざるに於て是珠算算術用を許したりしが此年八月
師範學校に於て教學教師連藤利貞をして珠算教授の書を
作りしむ利貞其術を珠算に採り其式し算術を撰つ題して
算數術授業書とも小官版教科書に珠算に只此一書のみ
米國猶立百年祭 七月 同國費府に記念博覽會の挙あり文部省
より日本教育史を出陳せんと八月編纂を大槻修二に嘱す
先是文部に日本辞書
六句告成更に英文に訳し刊本とす
編纂の議起る西村貞長の意見として貞負大槻文彦一人に命
ぜり其動機詳細を註す十間年成稿普通語凡四萬今所行
言海是也二書共に我國の創作に係る 下巻三文彦見参 大槻磐水の後
十一月京都同志社開校 上野人新島襄所設襄小し米國神學
校に学ひ去年帰朝し此社を設置す基督教學の始なり

三月官衙休暇日を日曜日と定む 先是一六休日として月に朔晦六四也
至是西洋風に倣ひ一週一四の休暇とす 日曜ドンタクと呼ぶ是オ
蘭語訛なり英語サンデイ也行樂日の義なりて六四休暇の時も
一六ドンタクと呼べり長崎にて以前より此稱あり日曜の外ドンタ
ズ休業遊樂をドンタクと稱す從て神社祭礼の假装行列ありなど
其事をドンタクと呼ひ肥筑の國々に傳播して通語となれり
七月布告 既に推計の得タル新聞紙に國安方官と認ムル者は其発行
禁止又停止スベシ 先是各新聞記者と民權論を提ケ米國の政態を
共和政治を建つべし又政府を人民の政府なり君主の政府にあらずと
なと盛に紙面に掲ケ禁錮笞刑の者比々相継く
九月詔曰 國憲創定は國家の重典千載の偉業なり汝等勝積俊事速に
竣功を奏セヨ 元老院議長有栖川熾仁親王同議官柳原前光福羽美
静中島信行細川潤二郎神田孝平を憲法取調委員とす 三年後憲法發布
先是工部省に工學寮あり是年工部美術學校を置き尋て工部大學校と
改稱 内務省に赤松學校を置く 後に帝國大學合併

四月東京大學建立 乃開成學校醫學校を合せたる理法文醫四科大學
後七年本郷新校地に移り遂に帝國大學と稱す
六月萬國郵便聯合に同盟して歐米諸國と交通を便ならしむ
十月學習院開校式を挙ぐ 華族教育の特殊學校なり
此時九州乱起る薩軍兵兒島に出て熊本城を圍む因て征討軍を遣りて
轉戰半歲熊本城を救ふ 先是六師所執火器各種なりしが此戰
門に依て軍號貫一の必要を覺り聞く 又聞く熊本籠城五十日餘
四月十四日援軍始て通ず其年一月入城せしを陸軍中佐山川浩なり
浩は會津藩士其城門に入るや大聲して貴ハどうした貴ハどうした
と叫ぶ城兵怪み問返すに戊辰籠城の時外敵より内憂を困外たりと
此言を聞き徹骨心付き各處注意せしに暗渠ありて二便を通じて白川
排泄となりて其臭吾を知せず一同兒將官の建策用到る感歎したり
元年戊辰閏東奥羽の戰より翌年函館の役あり其後佐賀熊本山口の
異變ありしも鹿兒島此一戰以後海内永く干戈の患を絶てり
第一内國勧業博覽會を東京上野に開く

組明治九年九月二十八日、不肖男清景、謹清修清復謹設追遠之
會、以祭磐水府君之靈、今茲而子、實其及復五十年忌辰、所以有
此舉、而用諱日則吉祭也、本日掲王父真影於中堂、陳列遺著於
其傍、前堂挂寛政中所行新元書圖、庭上則招請陸軍樂隊、合奏
洋樂九曲、其間書圖牧師仁幸奉氏、起演視辞、竟継以獨抑今日
文明之跡、實在西洋學術、蘊行于世之力、而論其夢起因、則不得
不謂由之吾王父首唱蘭學之功乎、故此會請惠臨諸君、皆自和
蘭文典、從事斯道者、聊所以報府君之靈也、 大槻修二同文彦野記

公開演說嚶鳴社起る福地源一郎開幸一等所唱出明年又福澤
諭吉も講談會を設く共に序料を收む
憶四年じおのめ開時入社を勧められしも木戸孝允
等四藩人じみて面白からずと拒絶して長廣舌く恵る板
はずりき 七月

學問の方一にしてレラ足らず力を專修の門に用フベシト雖也
別に見聞を弘ムル其ナカル可ラズ是此書編纂の本意なり
歐米學藝諸書内外名家論説等隨得抄訳逐次刊行セントス
復生材行涵養の功に於て少補ナクンバアラズト云爾
百科全書 第一篇 天文地文紀質農家 文部省刊行
文化幸未幕府天文臺の翻訳局を置く其第一着手厚生新編
百科全書也此局變轉六十又年是歳立て大學となる而して
文部先此書を刊行す首なり尾なりと云ふべし
敎學雜誌 東京敎學會社発行
神田孝平御幽悦塚本明毅小野友五郎福田理軒吾會員百餘
昔時武治の世算數を度外に措く方今餘習未去文武の職數
導の任を往々數學を講ぜず本會は公教一般數學の開進を
目的とす依て每會所議輯録印行す 立會の本志如此 神田孝平
日本洋學年表 大槻修二撰
第一勧業博覽會を東京に出陳して褒詞を受し其序論如左

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

511
~~527~~
28

泰西人の我邦を来る者は葡萄牙・西班牙の両國を其始とす當時南蛮と呼ぶ者是也我の交つゝ其戎器を取ひ入る在り彼の来つゝ其教法を弘むる在り彼の交つゝ其戎器を取ひ入る在り彼の来つゝ其教法を弘むるを在り足利氏其器を得て利を戦國に傳へ織田氏其教を納れて害を後世に遺す然共兵法医術の傳来と實に此時に始まり豊臣氏耶教の人民を誘惑するを憂み遂に其利害を并せて之を拒絶するを之を両國に繼きて到る者を和蘭英吉利とす之を紅毛と呼ぶ徳川氏興隆の初に當り彼等專ら互市の利を事として教法の害を傳へず其情所の久しきを耐ふる者此ハ之ハ由英人の来航を辞せしより和蘭猶其利を任ずる者二百餘年将軍吉宗天文を好み和蘭の其術を精しきを知りて始て禁書の禁を解き譯官の設を許せしも爭線の創見を属するのみ家所在職の時一旦書籍を渉ゝ少ハ英語を知され始て恰も猶文を講ぜれず其文書を請ひ可ら寸と是を於て一層の善良を花したり事情を通ずる能はず翻訳を歴されず其文書を請ひ可ら寸と是を於て一層の善良を花したり翻訳局を設立して蘭書の和解を掌らしむ是ハ洋學公行の原始として砲術も足利氏の世に起源を傳へし後全く舊法を守りしが天保西廣の客卿で利を世間に聞くの基本となる然共商業社會危の獄を起し蘭医禁制の令を下し常に臺學奥術を以て之を政法の外に黙けて斯學の進歩を害せしも唯海外の大勢通利を知ゝまるを坐するの外安政初米利堅國使の来りて通交を議するを及び昇平衡安の極富豪の中に中西島秋帆其新式を傳習を受けかゝ之銃隊の進退砲車の運轉等を事と恵し皆且和を約す歐洲大半皆交通の國となる而新此開國の業を學者の逢盛を無る

蓋又深謀遠慮の其利害を洞察せしを非ざるも其利ヤ洋書調所西洋醫學所を建て海陸軍制度法を倣ふを存し其害ヤ海内過激の士をして國を夷狄ならしめんを懸かしむ竟を国内を起すを終ふ

嗚乎今より之ハを論ずハを害を攘夷鎖國の徒を受けしも利を文明開化の今日を傳へて全國の大章福を醸成すと云はずを得ず是れ

徳川幕府の外交に関する概畧なり

西洋學術の傳統を述ぶ人ゞ青木昆陽始て吉宗の内命を受け此學を講習す前野蘭化・杉田玄白奇の餘見陽の教を受け音調訓詁統の端緒を就く此時訳書を業始て起り杉田鶴斎・中川淳庵・桂川月池・宇田川玄随・桂川甫周等各訳述の書あるも皆医術の一部をして其學の統を重ゝ、ものと大概

磐水實を蘭化の説を摭ひて蘭學階梯を梓行し字句梯績の法則を述へ横文の解く可く蘭書の請む可きを世人を示す是此學の中興として且翻訳局創設の時其首選を當れり宇田川榕庵其傳を磐水に得て翻訳の方法漸く定り坪井誠軒其業を榕庵を承けて始て和蘭文法を講し緒方洪庵其法を誠軒を受けて學科の等級を建置て是れ學統の大綱也其作箕川を榕庵の後より出で杉田梅里・誠軒の門を成す而子共を洋書調所建立の始より教授職を任じて大学問學の業を成就せ一ひ

磐水・榕庵・杉田氏以下皆医師なり各訳書を固りて其業を傳へたるも文政中普魯西医士シイボルトの長崎を来つを及ひ從て其學術を直傳ヒし者伊東玄朴・戸塚静海等頗多しして内外の療法を変る

一層の善良を花したり

砲術も足利氏の世に起源を傳へし後全く舊法を守りしが天保中西島秋帆其新式を傳習を受けかゝ之銃隊の進退砲車の運轉等を事と恵し皆且和を約す歐洲大半皆交通の國となる而新此開國の業を學者の逢盛を無る

是ハ皆嘉永以前を在る者なり其開國の後を出で能く百般の西洋學藝を究める者あるも皆此先輩教を待ちて興る者の外今其家學を述べて来る所を述ぶ前記を外國の交通を主とし正記て學士の事業を詳す其系歴進歩を浅略して洋學年表を作る

古序論と四十五年前の作也當時長崎の斯學を及ばざりしも

長崎を通詞世界と便来心得居たれ者なり今回新撰年表を浮書せんする當り今一度取調べんと出かけたれと依然たる長崎なるを文學上のもさして敢能なし仍て藏書中より見出し星學・詩學を就西本木吉祖中野謙氏を新書を加へ見てたべ

大正十五年三月　七十七翁大槻如電

三種郵便物認可　昭和二年二月十八日　[illegible]

新撰洋學年表

蘇峰生

大槻家は、學者としての日本の貴族だ。其の一門の識學者は嬉らく指き、蘭水先生・蘭洲先生、而して現在の如電翁之を最上に至る。安政年間から明治大正昭和に、明治大槻文彦博士の『言海』は、世界大學の後援、學問の家として、相ひ連繋してゐる。

日本洋學史は、如電翁が、其の父文彦博士五十年祭に当り、會に出版し、同年十一月に出版した。

たるものの部類より限りあれば、今日は稀覯となり、識者の如きも、其の一部を珍襲してゐる。

然るに、維新後の如電翁は、更らに大正元、大正新を加へて、改訂せんと企て、大正五年八月十七日、齢七十一歳の高齢より着手し、十二年一月より清書に取掛り、七月に至りて本編一百三十餘頁を日録し了つた。而して同年九月初一の大震災には、翁は此の稿本と一命とをもて、金瓶梅文庫の蔵書と共に、焦土に帰した。而して今で離く自費の憂、金瓶梅に捨て、世間に発行するに至つた。此れが『新撰洋學年表』だ。

今年八十二歳、生命あること不思議なれ。本表編後十年に漸も、一人の助手なく、寫字校合総て老人の自力なり。今此出版界は、分業法となり、著作者と発行者と各別なり。余は発行者に左右せられ、理想通りの書を作る能はざるを欲せず、編輯費は可成低廉として、通俗世の需用に供せんと欲ふ。自費の事にしあれば、販路は問ふ所にあらずの今人より見れば、一個の老愚物なり。

ちんの。孔子曰く、其智可及、其愚不可及。

相ひ撰らず、姑録式の『編』は、てゐる。孔子曰く、所、然れども滅ぶ。

『表』は『新撰洋學年表』と稱するも、實は日本に於ける洋學興廃の歴史だ。其の年月日を經とし、其の人物を緯とし、其間に凡有る洋學に關する事件、及び著譯等を撮ゝ。蓋し世の學者に寄與する、其の功勲多大である。

駿河文庫博士の『言海』編纂も、其功績成らんとすと。著者は、を延ばして、其の稿了の日を待つ。

昭和二年一月五日印刷
昭和二年一月十日發行

新撰洋學年表
定價金四圓

著者　大槻如電

金閣版印刷所印刷

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

511
~~527~~
28

泰西人の我邦を美う者え葡萄牙斯班牙の両國を其始とす當時南蛮と呼ぶ者是也我の交つゝ其戎器を取ひつゝ在り彼の来つゝ其教を弘むるゝ在り足利氏其罪を得て利を戰國を傳へ織田氏其教を納れて害を為して且翻訳局創設の時其首選を當れり宇田川榕庵其傳を繁水を後世に遺す然共兵法医術の傳来を賞る此時る始れり豊臣氏耶教の人民を誘惑するを慮み弛其利害を并せて之を拒絶するゝ之を両國を繼きて到る者を和蘭英吉利とす之を紅毛と呼ぶ徳川氏興隆の初め富り彼等を互市の利を事として教法の害を傳へず其情好の久しきを耐ふる者此ハ之れ由英人の来航を辞せしより和蘭獨其利を任ずる者二百餘年将軍吉宗天文を好み和蘭の其術を精しきを知りて始て禁書の禁を解き譯官の設を許せしも事緩を創見を厲すゝの外家斉在職文政中普魯生医士シイボルトの長崎を来つゝ及び從て其學術を直傳せし者伊東玄朴戸塚静海等頗衆多をして内外の療法を要る一層の善良を施したり

の時一旦禁令を激やりれ英蘭を親され始て惜り横文を講ぜざれば彼の事情を通ずゝ能はず翻訳を歴されど其文書を譯かすゝと是を於て砲術を定利氏の世の火縄銃を傳へし後全く舊法を守りしが天保翻訳局を設立して蘭書の和解を掌りしむ是れ洋學公行の原始なり

西蘭の等却て利を世間を聞くの基本となる然共尚亜社遣尼の徒を遂に中高島秋帆其新式の傳習を受け加之銃隊の退退砲車の運轉等を

し蘭医禁制の令を下し常に霊學英術を以て之を政法の外を黙けて古来の兵法火技を一変せり江川下曾根の徒其門より出て其術

斯學の進歩を害せしを唯海外の大勢通利を知ゝざるを坐するの外遂を盛を興る

安政初米利堅國使の来りて通交を議するゝ及び昇平倚安の抽倉皇事と處し苟且和を約す政洲大半皆交通の國となる所此開國の學を

是小笠原長水以前を在る者なり其間國の後を出て能く百般の西洋學藝を究める者あるも皆此先輩教子を待ちて興る者の外今其官

蓋又涅謀迷慮の其利害を洞察せしを非ざるも其利十洋書調所西洋事を訳して利害の及ぶ所を到ゝ其學事を叙して傳統の由

醫學所を建て海陸軍制度法を倣ふを存し其害や海内過激の士とし

て国を夷狄するの情慨を懐かしゝ竟を事乱を國内を起すを終ふ

嗚乎今より之れを論ずれば害を振興國の徒を受けしも利を文明

開化の今日を傳へて全國の大幸福を醸成すと云はずゝを得ず是れ

徳川幕府の外交を変すゝの概略なり

西洋學術の傳統を述ぶれば青木昆陽始て吉宗の内令を受け此學を

講習す前野蘭化好奇の稼昆陽の教を受け音調訓詁を端緒を就く

此時訳書を求て起り杉田玄白中川淳庵桂川甫周宇田川榕庵等各

訳述の書あるも皆医術の一部をして其學の統を変ゝ、ものと大概

繁水實を蘭化の説を摘み て蘭學階梯を梓行し宇田榕繁の法則を

述べ樹文の解く可く蘭書の請ひ可きを世人を示す是此學の中興

なるを在り足利氏其罪を得て利を戰國を傳へ織田氏其教を納れて害

を後世を遺す然共兵法医術の傳来を賞る此時る始れり宇田川榕庵其傳を繁水

人民を誘惑するを慮み弛其利害を并せて之を拒絶するゝ之を両國を

繼きて到る者を和蘭英吉利とす之を紅毛と呼ぶ徳川氏興隆の初め富

り彼等を互市の利を事として教法の害を傳へず其情好の久しきを

耐ふる者此ハ之れ由英人の来航を辞せしより和蘭獨其利を任ずる

者二百餘年将軍吉宗天文を好み和蘭の其術を精しきを知りて始て禁

書の禁を解き譯官の設を許せしも事緩を創見を厲すゝの外家斉在職文政中普魯生医士シイボルトの長崎を来つゝ及び從て其學術を

の時一旦禁令を激やりれ英蘭を親され始て横文を講ぜざれば彼直傳せし者伊東玄朴戸塚静海等頗衆多をして内外の療法を要る

事情を通ずゝ能はず翻訳を歴されど其文書を請ひ可きを世人を示す是此學の中興一層の善良を施したり

翻訳局を設立して蘭書の和解を掌りしむ是れ洋學公行の原始なり

西蘭の等却て利を世間を聞くの基本となる然共尚亜社遣尼の徒を遂に中高島秋帆其新式の傳習を受け加之銃隊の退退砲車の運轉等を

し蘭医禁制の令を下し常に霊學英術を以て之を政法の外を黙けて古来の兵法火技を一変せり江川下曾根の徒其門より出て其術

斯學の進歩を害せしを唯海外の大勢通利を知ゝざるを坐するの外遂を盛を興る

安政初米利堅國使の来りて通交を議するゝ及び昇平倚安の抽倉皇事と處し苟且和を約す政洲大半皆交通の國となる所此開國の學を

是小笠原長水以前を在る者なり其間國の後を出て能く百般の西洋學藝を究める者あるも皆此先輩教子を待ちて興る者の外今其官

蓋又涅謀迷慮の其利害を洞察せしを非ざるも其利十洋書調所西洋事を訳して利害の及ぶ所を到ゝ其學事を叙して傳統の由

醫學所を建て海陸軍制度法を倣ふを存し其害や海内過激の士とし

て国を夷狄するの情慨を懐かしゝ竟を事乱を國内を起すを終ふ

嗚乎今より之れを論ずれば害を振興國の徒を受けしも利を文明

開化の今日を傳へて全國の大幸福を醸成すと云はずゝを得ず是れ

徳川幕府の外交を変すゝの概略なり

西洋學術の傳統を述ぶれば青木昆陽始て吉宗の内令を受け此學を

講習す前野蘭化好奇の稼昆陽の教を受け音調訓詁を端緒を就く

此時訳書を求て起り杉田玄白中川淳庵桂川甫周宇田川榕庵等各

訳述の書あるも皆医術の一部をして其學の統を変ゝ、ものと大概

大正十年三月　七十七叟大槻如電

昭和二年一月五日印刷
昭和二年一月十日發行

新撰洋學年表
定價金四圓

著者　大槻如電
東京府北豐嶋郡日暮里町大字金杉二百五十八番地

發行者　大槻茂雄
東京市神田區花房町四番地

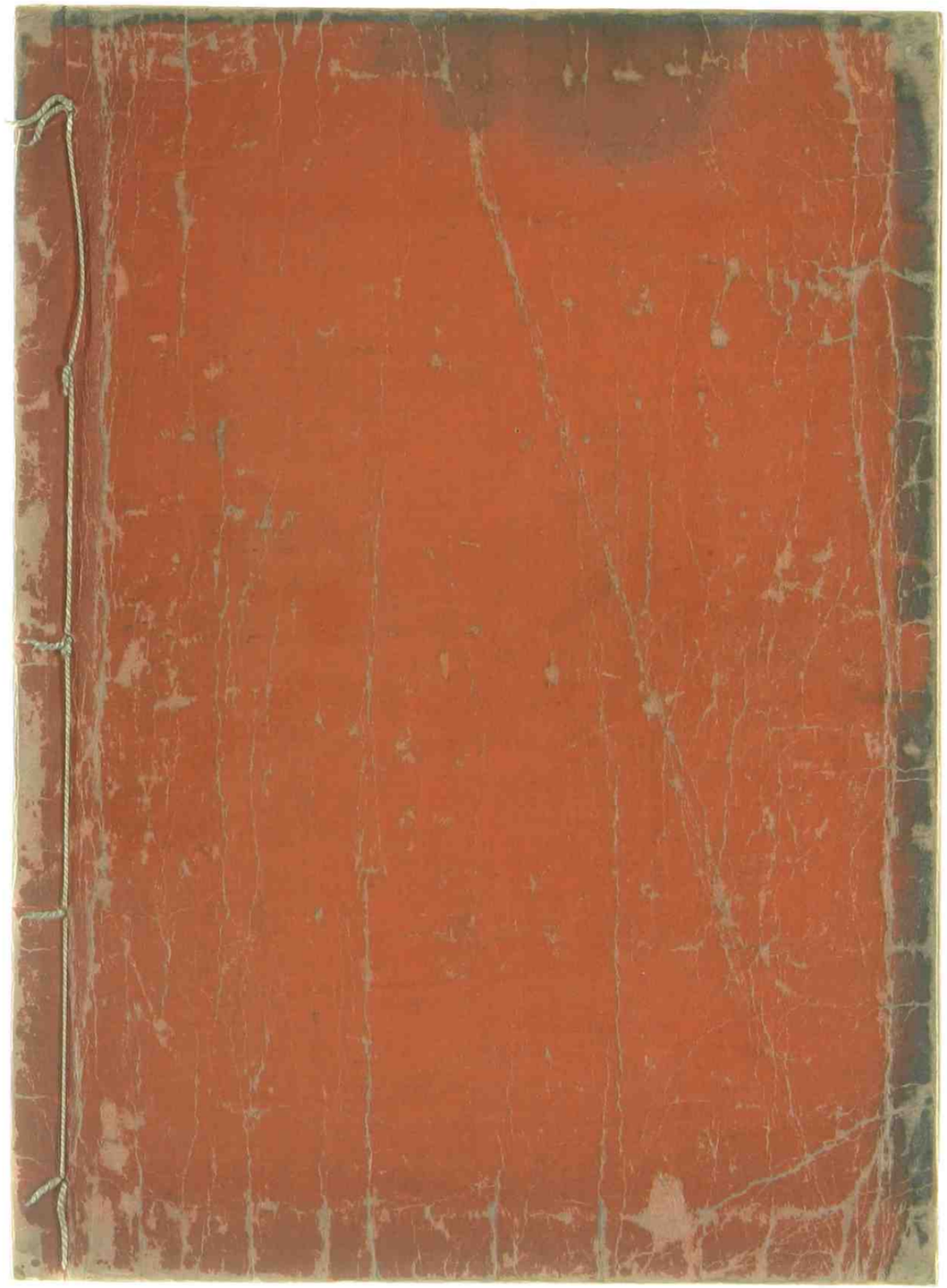
印刷者　七條儁
東京日本橋數寄屋町

發賣所　六合館
振替口座東京二三七一番

開成館
大坂北久寶寺町
振替口座大阪七九番

金屬版印刷所印刷

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵



長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵